

## 葛藤から受容へ、「吃音を広げたい」



松木 佳奈子

### <幼少期の葛藤>

小学校から中学校の間は、私がいままで一番吃音に悩み、ぶつかった時期です。幼稚園の頃から連発で、小学校に上がり授業中からかわれ始めてから、症状を抑えようと力を入れて、声を振り絞って、そこから難発に切り替わりました。吃音という言葉を知らず、なんとかこの喋りにくさを解消しようと足掻いた結果、報われることはありませんでした。クラスメイトや祖父、祖母に「なんでそんなももの」「落ち着いて喋れないの」と突っ込まれる日々。周りでどもりを受け入れてくれたのは母親だけでした。「おじいちゃんに育て方が悪いって言われたことがあった。佳奈の吃音のことで家族から孤立していたことがあった」と、最近になって当時私には見せなかった気持ちを伝えてくれます。

### <吃音の認知と、その影響>

大事だと思うのが、「吃音の認知」についてです。母が就学時検診で先生に「娘はことばがつまるんです」と相談しても、小学校で保健室の先生に相談しても「成長過程ですので、様子を見ましょう」と。私がすぐに専門機関に行かなかったのもそれが原因と思っています。認知というのは、当事者に対してです。「何だかわからないけど喋りづらい、ことばが引っかかって苦しい、こんなの自分だけだから恥ずかしい」という気持ちは、毎日頭や体中に恐怖としてまとわりつき、できるわけなのに、普通に喋らなきゃと思っていました。今は、小学生時代に身についた頭の回転のお陰で、瞬時に言い換えをしたり、あの、や、えーと、を話し始めにつけることで求めていた「普通」の喋り方を手に入れました。とはいっても、だめなときはだめで、根っこの部分はなにも変わっていません。演技が上手になっただけのことです。なにかも遅かったと思います。小学校のころにことばの教室やつどいのような場所に行けていたら…。認知の面でも生活場面での挑戦においても、とにかく吃音仲間での活動を内輪のものにしたくないのです。どんどん外に発信したいです。今わたしはバンド活動もしています。バンド活動は人前に出て自由に表現できることや、人間関係でも非常に多くの出会いがあり、とても楽しいです。相変わらず「普通という演技」は取れませんが、少しずつカミングアウトをしています。自分を出せなくて苦しんでいる子供たちに、「うまく喋れなくてもやりたいことがあれば怖がらず挑戦するべき。必ずそれが強みになる。」ということを、自分の経験を通して伝えたいです。



### <支援者の皆様へ>

吃音は「口が音を乞う」と書きます。ですが、私たちも皆さんと同じように自分の口で伝えたいことが沢山、沢山あります。当たり前なのが難しい、小学生のこどもたちはこれから本当にたくさんの挑戦があります。様子を見るだけの先生が減り、葛藤に寄り添って、それぞれの強みを引き出せる先生が増えてほしいと心から願っています。どうか、よろしくお願ひ致します。